



Title	「らうくし」考
Author(s)	犬塚, 旦
Citation	語文. 1957, 19, p. 39-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68514">https://hdl.handle.net/11094/68514</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 「らうくし」考

## 犬塚旦

源氏物語葵巻の、

つれくなるままに、只こなたにて、碁打、篇附などし給ひつ  
つ日を暮し給ふに、心ばへるらうくし、う愛敬づき、はかなき  
たはぶれごとのなかにも、うつくしき筋をしいで給へば云々（  
葵三七三。以下、対校源氏物語新釈本により頁数を示す）

のところに見える「らうくし」について、本居宣長は、玉の小櫛  
七の巻に、

これは功勞の勞にて、俗言にいふ物事功者なる事也。こゝも基  
うちへんつきのしさまの、さとく功者なるよし也。さて又らう  
たしといふ詞は、別にして、その意いたくはれり、思ひまが  
ふべからず。

と説いている。これに対し、島津久基博士は、この説明は一応当つ  
てているが、なお検討する余地があるとして、自説を提出せられると  
ころがあつた。即ち、博士は「らうくし」には場合によつて「ら  
うたし」と弁別できくいような用例も少くないとされて、

一般に或事に對しての行為の場合は、大略「勞々し」の義で积  
き得られるが（中略）顔容・聲音・心性・举动（態度）の場合

は、「勞々し」の意味の時もないではないにしても、寧ろ「愛  
らしい」の義（中略）が當るやうであり、特に心性・举动の場  
合は恰も両者の中間に位置する如き心持の狀が最も妥当感を与  
へるやうに思はれる。（中略）即ち愛らしい意味に功者の意味  
の加はつたやうな心持が、それらの文の「らうくし」の狀と  
して最も適解として落ちつくやうに感ぜられるのである。かく  
観て來ると、「らうらうし」は單なる「らうたし」（可愛い）  
ではない、少くとも可憐の意味よりもっと品位ある乃至は円熟  
した愛らしさと解してよいのではないか。（中略）恐らく「ら  
うたし」に知性的なものが含まつた感じが、「らうくし」であ  
るやうに思はれて来る。（一）

との見解を提示せられたのである。博士の説は、「らうくし」の  
從来見のがされきた意味性をつかれたものとして、たしかに領  
聽すべきものをふくんでいると思われるが、「らうくし」の意味  
性格は、博士の説をもつてはたして満足されてよいであろうか。そ  
こにはまだまだ検討さるべき問題がすどおりされとはいはしないで  
ろうか。また、ときほぐされていない面が、なおのこされていはし  
ないであろうか。ここに、王朝期文学作品なんづく物語・日記類  
にあらわれた「らう」「らうくし」について吟味しなおし、史的  
にあとづけつつ、「らうくし」そのものをとらえなおしてみよう

と企図する次第である。

## 二

王朝文学作品における「らう／＼し」の初見は大和物語(文庫本)の一例あたりである。同じく「らう」の語も、管見では大和の五例をもって初見とするのである。(「勞あり」<sup>(一例)</sup>)なお、「らうたし」の語もこの大和にはじめて一例姿を見せている。「らう／＼し」は故御息所の姉が、妹たちよりも歌をよむことが勝っていたことについて、「らう／＼しく」といつているのであって、「功者なる」という説が一応ますあたることはみとめられるであろう。「らう／＼し」の方もすべて良岑宗貞、玉淵増垣の御など人に關して用いられ、而も「玉淵はいと勞ありて歌などよくよみき」<sup>(五)</sup>と見えることなく、この物語では歌をよみ情趣を解するといったふうの人物にばかり用いられているのであって、「をかし」と並用されて、「いとらうありをかしくて世を経ける」<sup>(二〇)</sup>とか「らうあり、をかしき人々あり」<sup>(二四)</sup>とかと見え、「らうあり」には、そうした側面がつねにつきまとっていることを感じさせるのである。「らう／＼し」にしても、歌をよむことに關して用いられている点、やはり、そこに趣味性といったものとのつながりが思われるのである。とにかく、「らうあり」も「らう／＼し」も歌をよむことに関して用いられていることを銘記しよう。

つぎに見られるのは宇津保物語(有朋堂)である。ここには「らう／＼し」は二十三例、「らう」<sup>(名詞)</sup>四十例、うち「らうあり」三十六例、「らうある」<sup>(名詞)</sup>一例が見られる。用例はかなり多く、意味をたずねる上でのがかりがいろいろと得られることを銘記しよう。

「らう／＼し」は二十三例、「らう」<sup>(名詞)</sup>四十例、うち「らうあり」三十六例、「らうある」<sup>(名詞)</sup>一例が見られる。用例はかなり多く、意味をたずねる上でのがかりがいろいろと得られることを銘記しよう。

「らう／＼し」の方は、後陰女(心)、あて宮(心)、忠こそ(心)、千蔭亡妻(寿段)の女御、仲忠、女三宮(あこぎ)、宣耀殿(正明)、あて宮の御子、按察使の君、梨壺の宮の君、梅壺更衣、童一、嵯峨院三などと人物に關して用いられることがほとんどであり、ほかには、贈物のつくり方、琵琶の弾き方、戸口の叩き方といったところで、すべて人ないし人の行為に關するものばかりであることは注意せられてよいであろう。そして、この語は「かたち」の「清ら」「清げ」「をかしげ」「光り輝き」「眩ゆきまで」見るのとならべて、「心」の「らう／＼しさ」として用いられている場合がしばしば見える。即ち、「心」の「らう／＼しさ」は「清ら」「清げ」「をかしげ」的外貌となつて発現される場合が多いのではないかとの推測をいだかしめずにはおかぬのである。この語が「をかしげ」「をかし」「愛敬づき」「由ぐ」「花やが」「今めき」等の語とともにしばしばあらわれること三回であつて、(なお)「やう／＼し」の例ではあるが、「いとやくらかに愛敬づきたる人の、髪長にて、いとやう／＼しき」(國譲(上)・下三一六)というのもある。両者の間に何か濃いつながりの存することが察せられるのである。「愛敬づく」については別稿であらためてとりあげるはずであるが、すでにいくらかふれたものもあるので参照いただければ幸せである。とにかく、「らう／＼し」が人の外貌的属性を示す場合、あかるい華麗性を連想せしめるものがあることはみとめられるところといえようか。つぎに宮の君はらう／＼しく、これはなまめかしくおはすめる。(接の上(上)・下六一六)

の例は、「らう／＼し」と「なまめかし」とを対照使用していって注意せられるが、一方、

仲忠、夕ばえしてそこらの人にも似ず、勝れてめでたく容貌の清らなるよりも、さし歩みたる様、うち思ひつけるけしき、さら人に似ず、なまめき、らう／＼し。(初秋上六四六)

の「とく、「なまめき」と「らう／＼し」が共存している場合もあるのであって、「らう／＼し」は「なまめく」「なまめかし」的世

界にも、そうでない世界にも顕現しうる性格を示すものであったと考えられ、この点より云々する」とはしばらくひかえることとする。では、この語の本領はいずれに存するであろうか。まず、琴や琵琶を「おもしろく」あるいは「をかしく」弾くことに関する「らう／＼し」とつかわれていることは注意されていいであろう。

かたちもいとをかしげにおはすや。坊にも、内裏の宮、若宮よりは、この君をこそ。いとらう／＼しく故づきてぞ生ひ出で給ひぬべかめり(国譜(中)・下四二五)とも見える」とく、この語には「故づき」といった性格をくみとることがやはりできるのではないか。

(あて宮)あるが中に容貌清らに、御心らう／＼しく、今めきたる御心にもあり、物の心も思し知りたれば、(藤原の君上一〇二)

つまり、「物の心」を知る、趣味あり、情趣を解する、そういう能

力をも「らう／＼し」はつぶんでいるのはなかろうか。とにかくこの語には、「物事をよくこころえ、身につけてる」聰明さといつたものが一貫してうかがえるようである。忠こそついて、

心のさとくらう／＼しきこと限りなし。(忠こそ上一六八)といわれているさとさ・賢さといったものが、やはり、この語の意

味の中枢をなし、それが、この王朝時代の教養性といつたものとの連関よりして、多く趣味性の方に向に意味つけられてゆくことになつたのではあるまいか。さとい心のはたらき、それが、外貌に、態度に、動作にあらわれたのが、「らう／＼し」なのであって、主として、趣味的方面において、このはたらきがとらえられて、当期の「

らう／＼し」の意味性を色づけるところがあつたのではなかろうか。したがって、心のさとさと趣味性とが、宇津保の「らう／＼し」を意味づけていると考へてはならないであろうか。而して、人物の外貌の場合、ほとんどが、「愛敬づき」(下二三七)「清げに」「清らに」「をかしげに」「白く」「花やか」等々とあかるい華麗さをあらわす語とともに見えていることはやはり注意せられるべく、ほかには「なまめき」と、「氣高くもの／＼しき」(元和元年)と各一回くらいのものである。心理の場合は「さとく」とか、「物の心も思し知り」とか、知性や情語性に關するものである。以上で、宇津保物語における「らう／＼し」の用いられ方はだいたい見当がつこうかと考える。(つぎに、

(安御)賄うちしなどし給ふにも、いとらう／＼しう、まことに大將の相撲の事などおこなひ給ふにも、いと心深きらうの見ゆれば、あやしく似たる人の心様にもあるかな、と御覽じて、(初秋上六二四)

などに見ても、「らう／＼し」と「らう」とが、相似した内容性格のことばであることは察せられるであろう。「らう／＼し」はやはりこの「らう」を脣語にした形容詞であるとみとめてさしつかえなさそうである。さて、「らう」はどのように用いられているであろうか。「らうあり」の形で見えるものがほとんどゆえ、この形のものについて主として見てゆくこととしよう。「らうあり」は、木工の

君、童べ、神南備の藏人、女、兵衛尉、兼雅二、仲忠、仲頼の少将

の妹、女一宮、京人、人四等、人に関しても用いられることが多いとも多く、ほかに、節会に關し六回、相撲の準備、宣言、手紙、贈物の品、細工二、模様、食物、さらに、螢の光や、秋の夕暮、所二など自然關係にまでわたっている。人ないし人為的な事物がほとんどあるが、自然關係の用例の見られることは注目に値しよう。まず、能力のすぐれていることを示すものに、

見知らば中らぬもの故、鳥立ちなば興醒めなむ。らうある兵衛尉まづ試みてむや。(初秋上五九八)

のとき射に関するものもあるが、人間としての能力にはいろいろな方面がありうるわけであり、

たゞ此の世にいくばく、容面、らうある人のなかにも、勝れたる人、この二人こそはあれ(初秋上六一七)。ここらの年頃……見所あること無かりつるに、然こそいへ、只今の大将たちの、例の人たち勝りたる人にて心づかひせられけむいとらうあるかな。(初秋上六三一)

さらに、「情」の語とともに、

木工の君といふ人、らうあるものにて、「これを聞き知らぬ様なるは、いと情なし」とて(藤原の君上一五)

らうある女の情あるが(初秋上五九二)

らうあらん所にすゑて、情あらむ草木、花さかりにも、紅葉ざかりにもあれ、見所あらむ所の夕暮などありて(初秋上六二二)、「かくてものし給ふに、今宵この琴仕うまつる人、いとめでたき人なるを、朝臣なほ内膳につきて、この前の物すこし情づいたゞるものせよ。萬物などいと興ある物をえらびて仕うまつれ」と仰せられければ、この君たちの手をつくして、らうありとある人、殿上人などして、手づから組にむかひて、まことの有識たち、三四十人して調じ出だしたる、殊にいと清らなり。

(初秋上六八五)

などと用いられ、「らう」と「情」との関係はまことに深いものがあるいはわなければならない。「らう」は趣味的世界の能力としてとくに意味づけられるところがあるようである。

遊は少将にも優りたり。すべてせぬ業なく、らうありし人なり

(藏闇(中)下一六五)  
例の声をかへて彈けど、らうある人の御耳なればふと聞き知りて(初秋上六四三)

など、「あそび」の世界に用いられているものもそうといえようし、細工物、模様などに關するのもそうであろう。そして、

労ある物のかた、をかしき物の様など画いつけて(初秋上六九六)

その組いとらうありて、いと珍らしくをかしき事ども組みすゑたる(初秋上六九六)  
今めき、らうあらむもの(初秋上六八七)

など、「をかし」「今めき」などの趣味性に關係あることばとともにあらわれているものも、この縁で解しうるものである。かくて

「らうある秋の夕暮」(初秋上)、「面白くらうある所にたのしご遊ぶ」(吹上(下)四五五)というのも「風情ある」の訳語をあてうることとなるであろうし、節会の場合またしかりであろう。しかも、「らうあり」とい

う以上、やはりそのおくに、知性的な、すぐれた深みをひそませた「風情ある」であることはいうまでもなかろう。以上、見きたつて藏開(下)冒頭部の涼の詞に、「田舎人」に対して「京人のらうある」と見えていることもうなずけようといふものではあるまい。そこには、都会的な、洗煉された知的はたらき、教養、趣味性といったものが看取できるように思われるのである。而して、その外貌的あ

らわれは、「らうありし」について、

容貌も気近く、愛敬づきてぞありし。（藏開（中）・下一六五）  
と見えるごとく、いろいろの事に通じ、ねれて円熟し、かどのとれた、親しみある相をとつてゐるのではなかろうか。「いとらうある組みすゑ」を「いとめでたくなまめき」とい、、「らうありとある人」たちの調じ出したものを「殊にいと清らなり」などといつて、るが、いかめしい、冷い、近づきがたいふんいきを思わせるような用例はまず見あたらないようである。

落窓物語（有朋堂文庫本）には「らう／＼し」一例見え、

はじめの男君は十二にて、いと大きにおはすれば、宮仕へするともあやまちすべからず、かしこくおはすれば、春宮の殿上せさせ給ふ。書を読み給ふにも、さとくらう／＼しく心柄もいと賢ければ、若うおはしける帝におはしませば、遊敵に召し遣ひをかしきものに覺して（四六八）

とあり、その賢明な知的意味性は明白である。遊相手とされ、「をかしきもの」に思われるというのも、上來の考察結果をささえこそすれ、これにそむくものではない。

枕草子（岩波文庫本）には「らう／＼し」四例、「らう」一例。「らう／＼し」は郭公のほかは人に関する用いられ、人の謎々合しける所に、かたくなにはあらで、さやうの事にらう／＼しかりけるが（百二十八段・中一三九頁）

ほかない。

（伊周）

大納言殿は物々しう清げに、（中将殿はらう／＼し、いつれもめでたきを見奉るに（九十三段・中六三頁）

のごとく、「物々しう清げ」と「らう／＼し」が対照的に用いられていることは、郭公の声に関して、

らう／＼し、う愛敬づきたる（三十九段・上一六五頁）

といわれていることとともに、感覚的用法における「らう／＼し」の性格を示唆しているところがありはしないであろうか。なお、ほかに「りやう／＼し」の形で見えているものもあるが、「らう／＼し」と同様に解してさしつかえないと思われる。墨の久しくつかわれたのを「らうおはきに成りたるが」としても用いている。

以上の考察をかえりみつつ、以下、源氏物語の用例について、さらに検討を加えていってみよう。

### 三

源氏物語では、さすがに、この語の用例数は、王朝作品中最高峰を示している。「らう／＼し」湖月抄本三十五例、河内本三十三例。

「りやう／＼し」河内本に一例。「らう」湖月抄本十四例、河内本十三例。（湖月四例、河五例）ほかに「らう氣」一例。以上が管見に入れるすべてである。やはり、人物に関するものがほとんどであり、なかなか紫上がもとも多く、八例（心ざまへ五例）、ほかに紫上の書についても一例見える。（つぎは臘月夜・玉鬘・中君の各二回、なお、中君にはほかに書についても一回用いられ、玉鬘の姫君・同中君・明石上心おきて・明石姫君・中将の君・宇治大君・六君・匂宮心・

もまた、やはりそのものなれた熟練したようすをいっているものに

接案大納言心・藤中納言（十才の）、權の書等に各一回用いられ、藤壺

は「もて出でてらう／＼しき事も見え給はざりしかどいよかひあり思ふさまに」として、雲居雁は「いよかひあり、すぐれたるらう／＼しさなど物し給はぬ」として、浮舟の書に關して「殊にらう／＼しき節も見えねど」として用いられている。ほかには琵琶を弾くことや歎の綿について用いられているくらいのものである。右に見ても、「らう／＼」が、物語中、主要な女性と多く重なっていることに気づくであろう。この語は人の美としていちじるしく、ながんずく、女性美として独自の意義をしめることを想察せしめすにはおかぬのである。而して、紫上にもっとも特徴的な性格であって、ついで玉鬘・朧月夜に使用率の高いことは、とくに、紫上と玉鬘は河海抄のいわゆる「いづれも心ざまよき人」であり、わたくし自身別に論じたことのあることく、作中、女性としては「めでたし」の評語をえている回数はとも多く、(紫上十)また女の本といったお玉鬘七)もむぎがうかがわれるのであって、而も、そうした紫上にぬきんでておびただしく用いられていることは、この語の並々ならぬ価値性に由来するものといえるのではないか。まず

(き方はをさ／＼・・・)河内本以下同(・な)  
らう／＼しうかどめきたる心はなきなゝめり。いと・・・  
たげにおほどき)(か・・・・・)あはれなら  
・・・・・こめかしうおほどかならむこそ、らうたぐはあ  
るべけれ(末摘花二四一)

男君たち、十なるは殿上し給ふ。いとうつくし。人にほめられ  
(くも) (きら)  
て、かたちなどよういあらねど、いとらう／＼しう、物の心や  
う／＼知り給へり。次の君は八つばかりにて、いとらうたげに  
姫君にも覚えれば、(真木柱二〇一)

姫君はらう／＼しく深くおもりかに見え給ふ。若君は、おほど

かにらうたげなるさまして、(橋姫五)など見てくると、「らう／＼」と「らうたげ」とはやはり、対照的な語であることがしられるのである。同じ可憐美でも「うつくしき」は陽性をおび、「らうたし」は陰性をおびていることについてはすでに述べたことがあるが、「らう／＼」は他の用例など見くらべる時、この場合、むしろ「らうたげ」の幼さ・陰性等の傾向と相対するところがあるのでなかろうか。(らう／＼はどちらかといえどもむきをいしゃべりまた「らう／＼しきものから、若うをかし」(葉三三四)「御手、こまやかにはあらねどう／＼しう、草などをかじらうなりにけり。まして朝顔もねびまさり給へらむかしとおあひやる」(霧木四一七などは「らう／＼」の幼少性に対する性格を示していよう)さて、まず「らう／＼」が「かど」などと親近性をもつ、知的性格をおびるものであることは、

らう／＼しきたどりあらむも賢きやうなれど(若菜上三七四)心及ばぬ事はたをさ／＼なき、人のらう／＼しさなれば(藤裏葉二六三)  
何事にもらう／＼しうおはせし御心ばへなりしかば、人の深き心もいとよう見知り給ひながら(幻三二二)  
かど／＼しうらう／＼しう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の葉のみ(幻三三一)  
さるはこの君しもぞらう／＼しくかどある方の匂ひはまさり給へる(絶角一三四)  
等が証しようし、高い知性的な香氣、深い教養といったものを思われる用法も見られるのである。しかも、そうした賢明さが趣味の世界に發揮されること多く、

なほ／＼しきあたりともいはず、いきほひに引かされて、よき若人どもつどひ、装束有様はえならずととのへつつ、腰折れる歌合物語、庚申をし、まばゆく見苦しく、遊びがちに好めるを、この懸想の君たち、「らう／＼しくこそあるべけれ。かた

ちなむいみじかんなる」など、をかしき方にいひなして、心を尽しあへるなかに（東屋三）内侍のかみこそは、らう／＼しく故々しき方は人にはまり給へれ。（權二八九）いとさとくて、難き調子どもを、ただ一わたりに習ひ取り給ふ大方らう／＼しうをかしき御心ばへを、思ひし事かなふとおぼす。（紅葉賀二九二）

琵琶こそ女のしたるに憎きやうなれど、らう／＼しきものに侍れ。今の世にまことしう伝へたる人、をさ／＼侍らずなりにたり。（少女三一）

など、いすれも、そうした方向につかわれた例どもであろう。「をかし」「をかしげ」がしばしばともなわれるのもこれと関係があらう。さて、「らう／＼し」は「愛敬づき」二「なつかし」二「うつくしげ」等をともなつて親愛的傾向を示すうちにあって、

御方の御心おきての、らう／＼しくけだかくおほどがなるもの、さるべき方には卑下して、憎らかにもうけばらぬなどを、ほめぬ人なし。（若菜上三五七）色あひ、あまりなるまで匂ひて、物々しくけだかき顔の、まみいと恥かしげにらう／＼しう、すべて何事も足らひて、かたちよき人と言はむに飽かぬ所なし。（宿木二五八）

いとらう／＼しく恥かしげなる氣色も添ひて、さすがになつかう言ひこしらへなどして出だし給へる程の御心ばへ（宿木二六九）

など、「け高し」と並用され、あるいは「なつかし」に対する」とくであつてやや例外的な用法を見せてゐる。そこには、教養にうらづけられた思慮ぶかい人の、あるいはととのいたらいたる人の、心にくい知性美的側面を印象せしめるものがある。また、はなやかなふんいきの中に見えているものもある。「愛敬づき」「うつくしげ」

の場合もそうだが、「花やか」と並用されたり（紅梅三六七）、「らう／＼し」き姫君（玉齋長女）を「匂ひやかなる」ともいっている（竹河三九八）。以上かえりみて、「らう／＼し」はやはり、その賢明な知的性格と趣味性がとくに濃厚であり、そして、どちらかといえ、親愛的な、あかるいふんいきをとりやすい傾向にあることをあきらめえたかと思う。紫上について、

世の中にさいはひありめでたき人も、あいなう大方の世にそねまれ、よきにつけても心の限りおごりて、人のため苦しき人もあるを、怪しきまですずろなる人にもうけられ、はかなくし出で給ふ事も、何事につけても、世にほめられ心にくく、折節につけつつ、らう／＼しく、ありがたかりし、人の御心ばへなりかし。（御法三一七）紫の御用意氣色の、ここらの年経ぬれど、ともかくも漏り出で見え聞えたる所なく、静やかなるを本として、さすがに心うつくしう、人をも消たず、身をもやんごとなく心にくくもてなし添へ給へる事と、見し面影も忘れがたくのみなむ思ひ出でられる。わが御北の方も、あはれとおぼす方こそ深けれ、いふかひあり、すぐれたるらう／＼しさなど、物し給はぬ人なり。（若菜上三七八）

と見えてゐるが、これら、源氏および夕霧を通して見られた紫上こそは、まさに「らう／＼し」のもつとも高い円熟した姿を示すものと評され得よいであろう。源氏は、亡き紫上の「かど／＼しうらう／＼しう、匂ひ多かりし心ざまもてなし言の葉のみ、思ひ続けられ」（幻三三一）で涙を流している。そこには、先天的なものと後天的なものとのめぐまれた結合によつて創り上げられた玲瓈の円熟美が光つてゐる。

源氏物語の「らう」については、河内本の方に見えるものに、雲

居雁に關し、

らうありけだかきさまは知らず、いとらうたげにて（常夏八三）

と、やはり「らうたげ」と対照的に用いられているのがあるし、玉

鬘が「かど／＼しくらうありて」結婚についてりづに身を処した

ことを「いかにかどある事なりけり」と源氏をして思わしめている

（若菜下九八・九）。「かど」との親縁性はおおえず、やはり、ねれ

た、賢明な知的態度というものを印象せしめられる。なお、「らう

あり」は玉鬘に二回、柏木に関して一回用いられている。

つぎに紫式部日記（文庫本）の用例を見てみよう。すべて三例であるが、宰相君と宰相君（北野三位の女）と影子中宮との場合であつて、

いとをかしげに髪など常よりつくるひまして、容体もてなし、

らう／＼しくをかし。ただだちよき程に、ふくらくなる人の、

頬いと細かに、匂をかしげなり。（三六〇）

ふくらかにいと容体こめかしう、かど／＼しきかたちしたる人

の、うちゐたるよりも、見もてゆくにこよなくうちまさり、ら

う／＼しくて、口つきに恥しげさも、匂ひやかなることもそひ

たり。もてなしなどいと美々しく、はなやかにて見え給へる。

心ざまもいとめやすく、心うつくしきものから、又いとはづか

しき所そひたり。（三六一）

などと見え、「かど／＼し」との親縁性のほども思われるが、島津

博士もいわれるごとく、一見しては「かど／＼しき」容貌といふ印

象をうけるが、よく見てゆくと「こよなくうちまさり」って、「らう

／＼しく」眼にうつてぐるというのであって、「らう／＼し」は「かど／＼し」よりは一段上位の美感をあたえることばであったと思われる。「をかしき」・華麗さ・はづかしげさといった印象が、右の例にはうけとれるのである。中宮彰子の「御心あかぬ所な

く、らう／＼しつ心にくく」たしなみやかい資性についても記されている（三六七）。

#### 四

源氏物語以後では、狹衣物語（文庫本）「らう／＼し」五例（ほかに

「りやう／＼し」）一例、堤中納言物語（古典全）「らう／＼し」一例

栄華物語（大系本）「らう／＼し」六例、大鏡（改造文）「らう／＼し」二例、「らうあり」一例。以上が管見に入っている。これらについて概観してのち、結論にゆきつくことしたい。

狹衣物語では、一品宮に關して三回、狹衣に關して一回用いられているが、飛鳥井姫君について、

わざとけだかく誠しきよりは、中々様かはりたる打解などより始め、物はかなげにらう／＼しからぬもてなしなどの、怪しき

までらうたく。（六三）

と見え、やはり「らうたし」と対照的性格をおびていることがうかがわれるのである。狹衣については、

もてなしはひは、飽くまで意高う恥かしげになまめかしくて

御顔はこまかに美しげにらう／＼しく、愛敬づき給へるなど、所かへ

は、誠にはなんと、あたりまで匂ひみち給へるなど、所かへて見奉るは、又光ことにめでたく見え給ふ（一四七）

とあって、かれはさまざまな面を取集めかねそなえた美しさにかがやいている。一品宮については、その「まみいと恥かしげに、らう

／＼しく清げ」（三〇〇）であるとか、その「目尻」が「らう／＼しげ」（三〇一）であり、あるいは「恥かしげにらう／＼しげ」（四七一）で、煩わしい氣持をいたかせるとしてえがかれている。

堤中納言物語のは、少将（三位中將の誤か）の「らう／＼しく愛敬づき」でいるのに対して、中納言は「なまめかしく恥かしげなる」としてえがかれているものである。（逢坂越えぬ權中納言六三）

榮華物語は、道兼、道長、三条院（三回）、一品宮（章子）に関して用いられ、道兼も道長も「らう／＼しうをゝしう」あったと見えるが、道兼の方はさがなく、道長の方は、道心もあって、人を思いかえりみ、はぐくんで、人望あつかったことがのべられている。三条院については、「らう／＼しく」、「をかしう」、「今めかしう」、「恥かしげ」で、「何事もはえある様に坐ば、万もてはやし思し召したり」（二四一）とある。一品宮は「花々と盛りに桜の咲きこぼれたる心地して、氣高く匂ひらう／＼しく今めかしう、をかしげなる」御有様であったという（六一八）。以上、榮華の用例も、道兼のは老僧ながんじをあたえるが、すべて、知的な、あるいは趣味を解する、あるいは華麗性をおびた意味あいを印象せしめられる。

大鏡には、選子が「い」というに、「らう／＼しく」あられたこと（一四七）、行成が「すこしいたらぬことにも、御たましひのふかくおはして、らう／＼しくしなし給ひける御根性」（一七五）であったことがのべられている。「らうあり」の方では、玉淵が「いとらうあり」で、歌など上手によんだと見えている。

以上、「らう／＼しう」が概観になってしまったが、「らう／＼しう」は繁上や中宮靴子などにそのもつともすぐれた高度なあらわれを見せ、道兼あたりに、もつとも低次の相を示しているかと思われるがいずれにせよ、その知的なさとさ、堅さといったものは、いずれにも貫して見られるところであり、かつ、それが趣味の世界に發揮されること多く、而して、全体としては、どちらかといえば、親愛感を人にいたかせ、華麗な外貌をとりがちな傾向にあることもいえようかと思う。けだし、人格を、生活態度を、容姿を、時代理想の規準へと高めてゆくための知的營為、教養といったものが、そしてその結果が、「らう／＼しう」という相をとつて具象されていったのではないか。かくして、そのもつとも高い達成をとげたのがまさに紫上であつたと考えられるのである。島津博士のごとく「らうたし」に知性的なものが含まつた感じが、「らう／＼しう」であるとすることは、なお問題があるのでなかろうか。「らう／＼しう」はあくまで「らう／＼しう」であつて、その知的營為が時代・規準に向つて發揮されてゆく時、この時代の理想美と、結果としてかなつてゆくことになりうるまでであつて、當時愛好された美が「なまめかし」であり、「清ら」であつたことよりして、すべては、おのずとそうした目標へと志向され、みがき上げられてゆくことになつたのではないかろうか。「らうたし」はいうまでもなく、「なまめかし」系に属し、湿性をおびた可憐美をあらわすことばであつた。「らう／＼しう」が近接を示したのは、同じ「なまめかし」系でも、むしろ、あかるい傾向をおびたものであつたのであって（愛敬づく、うつくし等）、むしろ「清ら」的なそれにかたむいていたというのがより事実に近いのではなかろうか。思うに「らう／＼しう」がこの時代にとつてもつとものぞましい発現のかたちをとる時、おのずから、それは時代の理想美の中にその座を見出でてゆくことになつたといえよう。島津博士のごとく説くことは誤解をみちびくおそれなしとしないのである。ただ、この語にどのような漢字をあてたら適當かといふことについては、博士もいわれることく、「良々」も「勞々」も後世的な考え方からの死字にどどまるのではないかと考えられ、い

まとめて適切と思われるものも思いあたらない。本稿においては、さらに、「かど」「かど／＼し」についても検討する予定であったが、紙幅の都合で稿をわかつこととした。ただ、「かど／＼し」が「うるはし」系に位置して、情味にとぼしく、もののしい感じをともなうことのみ記しておく。「かど／＼し」の究明はやがてまた「らう／＼し」の理解を助けるところが多いであろうと思われる。

(昭和三一・三・二一稿)

註

- (一) 島津久基博士「らう／＼し・らうたし」(「国語と国文学」第二十一卷第九号、「国文学ノート」所収。なお、同博士著対訳源氏物語講話(6)葵の二九五頁から三〇六頁にわたってべられてもいる)。
- (二) 拙稿「清ら・清げ私見」(芸林第六卷第四号)。
- (三) 同「匂ゑ」「匂ひやか」「花やか」考(平安文学研究 第十五輯)。
- (四) 同「今めかし考」(国語国文第二十卷第三号)。
- (五) 同「源氏物語の『うつくし』と『らうたし』」(平安文学研究第十一輯)。
- (六) 同「なまめかし考」(芸林第三卷第三号)。
- (七) 同「ゆゑ」と『よし』(未発表)。
- (八) 同「あて附け高し」(ばんせ第二十三号)。
- (九) 同「源氏物語における理想美の問題」(芸林第五卷第一号)および「源氏物語の華麗美—『今めかし』追考—」(昭和二十八年十一月三日京都大学国文学会研究発表会発表)。
- (一) 註五参照。
- (二) 註三参照。
- (三) 拙稿「源氏物語における理想美の問題」。